

すべての人がガンを卒業で
きますように



小城ゆり子

すべての人がガンを卒業できますように

すべての人がガンを卒業できますように

山引洋子

Nさんがガンで亡くなった。

この人は、「戦争を語り継ごう」というメーリングリストを主宰していて、ともすれば風化しがちな戦争体験を、体験者である老人から若者へ伝える仕事をなさっていた。私は昭和十八年生まれで、赤子のとき空襲を体験した最後の戦争体験世代だが、なにしろ赤子のときのこととてわからないことが多く、Nさんのメーリングリストで様々な情報を与えてもらった。

Nさんには長生きしてもらいたかった。まだまだ生きて、いろいろな情報を与えてほしかった。戦争体験世代が次々と亡くなっていく。惜しい人たちほど、すぐに亡くなるのだ。もっといろいろ語ってほしいのに。

でも、Nさんが末期ガンと聞いて、私はその死を予感していた。私の周りでは、大勢の人たちが次々とガンで亡くなっている。昨年、夫の兄、徹男さんが肺ガンで亡くなった。抗がん剤も効かない悪性のガンだった。次いで、夫のずっと前に亡くなった兄の妻、未亡人の雪子さんが、大腸ガンで手術したところが壊疽になって、亡くなった。夫は九人兄弟の末っ子なので、年をとった兄姉が多いのだ。末っ子の夫がもう七十一歳である。

十一年前、私は子宮体ガンの手術を受けた。同時に、母も乳ガンから肺ガンに転移した。親子同時にガンに見舞われたのである。

しかし、まだ五十代前半だった私は、手術してもらえたが、八十代の母は、寿命だからと手術してもらえなかった。

母自身が手術を嫌っていたこともあるが、医師が、「もうお年ですから、お体をいじりたくないのです」と言ったのだ。その母の話聞いてから、私は自分の病院へ行った。いつも検査してもらっている産婦人科で、「もっと大きな病院へ行って、検査してもらってください」と言われたのだ。

大きな病院……海のそばにある市立病院で、私はガン告知された。

「ガンです。今日検査して、三日後入院、五日後手術」とあっさり決められてしまった。否も応もない。

病院から母へ、泣き泣き電話した。

「私もガンなんだって」

「えっ？」

「手術するんだって」

「まあ」

「子宮ガンなんだって」

「そう」

涙がどつとあふれてきた。

「どうしよう……ガンだって」

「ごめんね、洋ちゃん」

母は私にあやまった。

「ガンなんか、遺伝させて、ごめんね」

母は、乳ガン、肺ガンである。私は子宮体ガン。これは遺伝だろうか？ 遺伝は関係ないのではないだろうか？ でも、母は、遺伝だと思って、私に謝罪した。

実は母が遺伝を気にするには、理由があって、母方の祖父、祖母とも、胃ガンで亡くなっている。また、母の二人の弟たちは、上の叔父が胃ガンで、下の叔父が肺ガンで亡くなっているのだ。ガン家系か。

家に帰って、母に告げた。

「明日、家の人と一緒に病院に来るようにと言われたんだけど」

「あたしが行くよ」

夫に頼めば良かったのだが、母が行くと言う。近所の世話好きの山田さんが心配して着いてきてくれた。

病院で順番を待つ間、母は苦しくて倒れそうだった。看護師さんが、私のことでなく、母のことを「大丈夫ですか？」と心配する。あのとき、母は、ガンの痛みで苦しかったのだろう。

先生は、「大丈夫ですよ。最善をつくしますから」とおっしゃった。

そして、手術の日……さすがに母はもう来られなくて、夫と、遠方から姉が来てくれた。

私はまな板の上の鯉である。手術台に乗せられ、運ばれて……「麻酔しますよ」と麻酔科の先生が言った。

と、次の瞬間、「洋ちゃん、洋ちゃん！」と私を呼ぶ姉の声が聞こえた。もう私は手術室ではなく、病室にいた。そばに姉と夫がいた。

そうか、手術は終わったのか……と、私は確認する。麻酔されていた間、私は何の意識もなかったのだ。その間の時間は、なかったと同じだった。

何もない……これが死というものか？ 死んだら、こうなるのか？ でも、私は生き返った。

こうして私は生きている。この残された後の人生を大切にしよう、と思った。

私は順調に回復した。病室に先生が来てくれて、「ガンのそばにでっかい筋腫があったんだよ。それが、ガンの進むのを妨げて、リンパ節に進むのを阻止してくれたんだ。筋腫があって良かったね」と言った。ほんとうに何が幸いするか、わからない。

でも、私は子宮のほかに、卵巣も取られてしまい、女性機能を失った。卵巣から出るホルモンが悪い働きをするからだとか。私はもう閉経しているから、どうでもいいようなものではあるが……でも、悲しかった。手術前に一言言ってくれても良さそうなものなのに、とも思った。

でも、私のガンは初期で、助かった。転移しなかった。

だが、母は、助からなかった。私の入院中に、痛みが酷くて、妹が母を別の病院に入院させた。妹は千葉市に住んでいる母や私たちとは電車で一時間ほどの市川市に住んでいる。母の面倒を見ていた私が入院したので、妹が母の許に来てくれていたのだ。私たちは三人姉妹である。

退院した私は、母の見舞いに行った。

「洋子、大丈夫？」

母は自分のことより私の心配をする。

「無理に来てくれなくてもいいんだよ」

「ううん、別に無理はしていない」

私はすぐに元気になった。

だが、母は、痛みが酷く、モルヒネを注射するしかなく、だんだん衰えていった。

そして、迎えた母の死。

父はすでにない。母より三年早く、脳梗塞で逝っていた。

どうしようもなく、知ってしまった肉親の死。悲しい……。

私は乳ガンを怖れていた。子宮ガンをした人は乳ガンになりやすい、と医師が言ったのだ。注意するように、と。毎年、乳ガンの検査はかかさない。今のところ、大丈夫。先のことはわからないが、子宮の手術をして十一年、何事もない。

それでも、みんなが私のように、幸運にガンを卒業するわけではないのだ。大勢の人がガンで逝った。夫の友人も。

夫の兄姉。昨年亡くなった二人のほかに、大腸ガンを手術した東京の兄嫁美津子さんと、腎臓ガンを手術した春日部市の兄真二さんとがいる。何しろ夫には老いた兄姉が多いのだ。この人たちはどうなるのだろうか？ 私のように、ガンを卒業してくれるだろうか？

Nさんは、素晴らしい功績を遺した方だった。戦争を語り継ぐ……そうして世界の平和を招く……まだまだ生きていてほしかったのに、ガンはNさんを奪っていった。

私の幸運はまれだったのだろうか？ ガンで亡くなった人たちの多いこと。この違いが私を悩ませる。将来、私もまた違うガンになって、今度はガンに負けるのではないか？ そんな不安が心をよぎる。

みんながガンを卒業できる日。その日はいったいつ来るのだろうか？